日本医科大学
千葉北総病院 News
広報委員会・医療連携支援センター
Vol. 68
October 2020

地域医療支援病院の取り組み

日本医科大学千葉北総病院
事務副部長
伊東 秀一
（いとう しゅういち）

新型コロナウイルス感染症が国内蔓延期を迎え、全ての医療機関の日常診療に大きな影響を与えていることと思います。当院も全職員が一致団結して様々な対応、感染防止対策に力を入れ、院内感染の発生予防に万全を尽くしております。

当院は、地域の基幹病院として、また、がん診療連携拠点院として「安全で質の高い医療」を目指して日々の診療にあたっておりますが、地域の医療機関との連携も非常に大事にしております。今、千葉北総病院で進めている「地域医療支援病院」としての取り組みをご紹介したいと思います。

「地域医療支援病院」とは、地域の病院や診療所などを後方支援するという形で、医療機関の機能の役割分担と連携を目的に創設されました。千葉北総病院では、病床や高額医療機器等の共同利用、24時間救急医療の提供、地域の医療従事者に対する研修の実施等で地域医療を支える役割を持ちます。また、当院と連携登録してくださった地域の先生方が、千葉北総病院の医療機器、たとえばMRIやCTを利用していただいたり、千葉北総病院の主治医と共同して入院患者さんの治療にあたったり、医局のカンファレンスや、当院が主催する研修会、勉強会に参加していただいて、知識の向上や情報共有を図ることができます。患者さんにとって、千葉北総病院の主治医と地域の先生方との診療がより継続的に行われることから、一貫した治療ができるメリットがあります。登録された先生方は、入院中も紹介患者さんの状態を把握できるので、退院後の診療に役立つことや、患者さんとの信頼関係にも繋がります。

この取り組みは、まだ始めて間もなく、実績は少ない現状ではありますが、千葉北総病院の使命として、地域全体の医療の質向上を図り、地域の患者さんに、より良い医療を迅速に提供できるよう努めてまいりますので、益々のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

1 眼科

最近の当科の手術状況

部長 亀谷 修平（かめや しゅうへい）

諸先生方にはいつも貴重な症例をご紹介いただき誠に感謝申し上げます。当院の現在の手術、待機期間などについてご紹介させていただきたいと思います。白内障手術については、現在月に130件程度で手術を行っております。比較的待機期間は短めで、患者さんを長くお待たせすることなく通常であれば受診の1ヶ月から、遅くとも2ヶ月後には手術を行うことができています。

最近、術後早期あるいは術後長期の眼内レンズ偏位などの眼内レンズ2次挿入を必要とする症例が多くなっていますが、そのような症例には山根式ダブルニードル法による眼内レンズ強膜内固定法を行っています。IOL支持部の固定方法は以前は強膜内ポケット埋没法を採用していましたが、現在は山根式フランジ法を採用しています。この手技はきれいに眼内レンズを固定できるようになるまでに熟練を要しますが、慣れてくれば眼内レンズの支持部の脱落の危険もなく、また比較的短時間で手術を終わらせることができるため患者さんの負担も減ります。IOL固定前に完全な硝子体手術を行ってからIOLを固定していますので、術後のIOL固定も良好で硝子体牽引によるIOL偏位、網膜剥離などの合併症も起こっていません。

当院には元々チン氏帯脆弱、浅前房、狭隅角などの難症例を多くご紹介いただいておりますが、ほとんどの症例では水晶体超音波摘出＋眼内レンズ嚢内挿入で遂行できております。しかし、術前検査にて高度な水晶体振とうがあり、CTR（Capsule tension ring）を使用しても水晶体嚢内に眼内レンズを固定することが不可能と考えられる症例に対しては、計画的に水晶体摘出＋硝子体手術＋山根式眼内レンズ強膜内固定術を行っています。白内障手術を自院で行われている先生方におかれましても、術前検査でチン氏帯脆弱や水晶体振とうが認められ、合併症の生じる可能性が高いと考えられる症例は、ご紹介頂ければ当院で対応させて頂きます。今後ともご紹介のほどを何卒よろしくお願い申し上げます。

2 脳神経内科

アルツハイマー型認知症の根本治療薬がいよいよ登場？

部長　山崎 峰雄　（やまざき　みねお）

現在の認知症の薬物治療にご不満の方々も多いのではないかと思います。「薬を始めたら良くなるのかと思ったのに‥‥」、「うちは怒りっぽくなったようで‥‥」とお感じになっているご家族の方もおられると思います。

現在使われているアルツハイマー型認知症の治療薬は、症状改善薬でありますが、実際の現在の状態よりも良くなったと感じられるのはお使いになった方の1～2割程度ではないでしょう。内服開始から1～2年の間に本来進行する症状の程度が軽減する、というのが本薬剤の効果です。

現在の薬物治療は限定的であり、ご家族の方も、われわれ診療させていただく立場の者も、根本的な治療効果を有する薬剤の登場を、首を長くして待っております。

薬物治療の限界を補完するというわけではありませんが、2020年4月から当院には千葉県認知症疾患医療センターが設置され、印西市、佐倉市、成田市、四街道市、八街市、白井市、富里市、酒々井町、栄町の9つの市町を担当させていただくことになりました。認知症疾患医療センターの主な役割は、①専門医療相談、②鑑別診断と治療方針の決定、③行動・心理症状（BPSD）・身体合併症への対応、④地域の関連機関との連携、⑤連携協議会・研修会の開催、啓蒙活動など多岐にわたっておりますが、いずれの問題に関して、まず、ご相談・ご連絡をいただければと思います。認知症相談の患者相談窓口として直通電話（0476-99-0413）も用意しておりますので、困ったことなどおありでしたら、お気軽にダイヤルして下さい。

本題に戻ります。さて、今年に入り、アルツハイマー型認知症の治療薬に関してビック・ニュースが入ってきました。2019年3月に、いったんは効果がないと開発が打ち切られたアルツハイマー型認知症の治験薬抗アミロイドβ抗体アデュカヌマブですが、データの見直しによって有効性が認められたと発表されたのが、2019年10月でした。その後、異例ではありますが、米国で治験データのFDAへの申請が認められ、審査が始まりました。当院でもつい最近になり、安全性を検証するアデュカヌマブの治験が再開されたところです。

今まで多くの 根本治療薬（疾患修飾薬）が開発されましたが、いずれも途中までは比較的良い結果を出しながらも、フェーズ3になると、有用性が否定され、開発が中止となるという歴史が繰り返されてきました。しかし、今回の抗体薬は認知症専門医の間では「最後の砦」と捉えられており、2021年3月の米国FDAの発表を、固唾を飲んで待っています。

3 医療連携支援センター

千葉北総病院による「新しい医療連携プロジェクト」の発信
－独自の地域再生・地方創生を目指して－

院長補佐
医療連携支援センター長　**渡邉 昌則**（わたなべ　まさのり）
消化器外科 病院教授

仲秋の候、近隣ご施設の先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。昨年の人事異動によりまして、2019年4月付けで千葉北総病院に異動して参りました消化器外科の渡邉昌則でございます。1987年に日本医科大学を卒業以来、大学院に進学した4年間を含め、32年にわたり武蔵小杉病院の消化器病センター（現消化器外科）に勤務して来ました。2019年4月より千葉北総病院の医療連携支援副センター長、2020年4月から医療連携支援センター長、院長補佐として、消化器外科との兼務ながら医療連携支援部門を統括させて頂く事になりました。

そこで、足跡が残るような医療連携プロジェクトを模索しておりました所、別所院長から「日本医科大学千葉北総病院の地域医療支援病院の獲得」、浅井副院長から「得意分野を持つ近隣の連携病院・開業医の先生への逆紹介システムの構築」という二つの課題を「新しい医療連携プロジェクト」として、至上命題に頂きました。どちらも現在まで実現できなかったプロジェクトであり、越えなければいけないハードルが沢山ございますが、医療連携支援センターの強みである多職種横断型の特長を生かし、日々ワーキンググループで実現に向け鋭意努力しております。

地域医療支援病院の目的は、紹介患者に対する医療提供、医療機器の共同利用等の実施を通じて、かかりつけ医を支援し、効率的な医療提供体制の構築を図ることです。現在、千葉北総病院は地域包括ケアの実現により、紹介元医療機関への逆紹介率80%前後という高い基準を満たしております。地域医療支援病院の運営に関しては外部委員の協力が不可欠であり、多くの近隣医療機関の先生にお願いをしている最中でございます。また、地域医療支援病院は医療従事者への研修や講習会が多く行われており、近隣医療機関の先生方も専門分野以外の知識や技術が高められるチャンスがあります。

一方、逆紹介推進に向けた取り組みのなかで、かかりつけ医を決めるための有効な手段として、その専門性を重視したシステムの構築を検討しています。「得意分野を持つ近隣の連携病院・開業医の先生への逆紹介システムの構築」につきましては、近隣の連携医療機関の専門性の調査が始まったばかりです。今後は、開業医の先生の得意分野に沿って患者さんをお返しするシステムの構築を視野に入れています。地域医療連携の新たなロールモデルになれるよう、「新しい医療連携ネットワーク」作りを進めていきたいと思います。近隣の先生方におかれましては、今までと変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

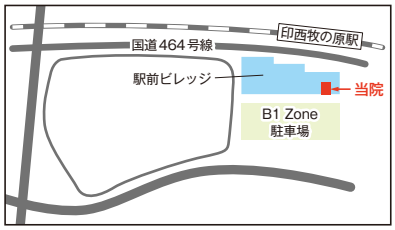
地域連携医療機関のご紹介 vol.01

日本医科大学千葉北総病院では、地域の医療機関との相互連携を一層強固にし、医療を必要とする患者さんのニーズに応え、適切で切れ目のない医療提供の実現を目指しています。このコーナーでは、当院の連携登録医としてご協力いただいている先生方を紹介してまいります。

マハナレディースクリニック

院長　鴨井 青龍先生

診療科目▶産婦人科
診療時間▶月・火・金　9:00～11:30／13:30～15:30／18:00～19:30
水・土　9:00～11:30／13:30～15:30
日　9:00～12:30



住所：〒270-1335 千葉県印西市原1-2
BIGHOPガーデンモール印西 V-111-1
電話：0476-37-5812
URL：https://mahana.clinic

1. クリニックを始められた経緯を教えてください

北総病院の女性診療科部長をしているときに思ったのは、良性腫瘍の術後、あるいは、癌の手術や化学療法など治療を行った後、経過が良好で、ある程度落ち着いた後の診療を受け入れる医療機関がなかなか見つからなかったことです。それなら自分が退職した際に以前とは逆の立場で患者さんたちの今後をフオローアップする医療を提供したいと思いクリニックを開業しました。

2. 貴院の特徴を教えてください

「町のお医者さん」といった感じで、自分の症状がどこの診療科にかかったらよいかがはっきりわからない患者さんでも受け入れるようにしています。

また、特徴というわけではありませんが専門的な治療を行うというよりは幅広い診療が行えるように努めています。

3. クリニックと大学病院で診療の違いはありますか？

大学病院では、手術を目的として紹介されることや、癌の治療など、生命にかかわる病気の治療を目的として来院されることが多いです。それに対して、クリニックの診療では、様々な訴えから、ある程度診断をつけて、当院で見たほうがいいのか、高次施設へ紹介したほうがいいのかを振り分ける必要があります。

具体的には、妊娠の診断や初期の健診、生理痛・不正出血、生理まえのイライラ（月経前緊張症）など、月経に関する症状、また、腟炎などおりものに関する症状、さらに更年期障害や不妊症を訴える方が多いです。

4. 地域医療連携についてはどのようにお考えですか？

医療連携はとても大事だと考えます。例えばクリニックで診察する症状を大学病院で診察するとなると、大学病院の診察が忙しくなり、本当に大学病院でしかできない治療が受けられなくなる状況が発生します。

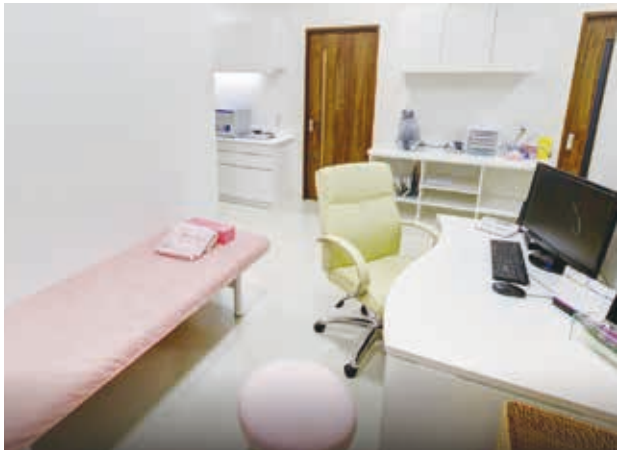
そのため、病診連携を通して大学病院の負担を減らしたいと考えています。

5. 今後の千葉北総病院に期待することはありますか？

専門性の高い診療を目指して欲しいと思います。

治療が終わったあとにフォローアップをクリニックにお任せいただける病診連携の関係を今後も築いていきたいと思います。

入口



診察室

日本医科大学千葉北総病院の理念

Ⅰ 日本医科大学の教育理念と学是

教育理念：愛と研究心を有する質の高い医師と医学者の育成

学　　是：克己殉公（こっきじゅんこう）
（私心を捨てて、医療と社会に貢献する）

Ⅱ 病院の理念

患者さんの立場に立った、安全で良質な医療の実践と人間性豊かな良き医療人の育成

Ⅲ 病院の基本方針

1. 患者さんの権利を尊重します。
2. 患者さん中心の医療を実践します。
3. 患者さんの安全に最善の努力を払います。
4. 救急医療・高度先進医療を提供する指導的病院としての役割を担います。
5. 地域の保健・医療・福祉に貢献するため、基幹病院としての役割を担います。
6. 全ての人のために健康情報発信基地を目指します。
7. 心ある優れた医療従事者を育成します。
8. 先進的な臨床医学研究を推進します。

患者さんの権利

1. 人間として尊厳のある安全で良質な医療を受けることができます。
2. ご自身の判断に必要となる医学的な説明を十分に受けることができます。
3. 医療の選択はご自身で決定することができます。
4. ご自身の診療に関わる情報を得ることができます。
5. 他の医療機関を受診することができます。（セカンドオピニオン）
6. 個人情報やプライバシーは厳守されます。
7. 児童（18歳未満の全てのもの）は、上記6項目に関し成人と同じ権利を有します。（こどもの権利憲章を参照）

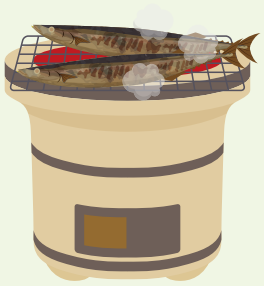
患者さんの責務とお願い

1. ご自身の病状や既往症について、詳しく担当医師にお話しください。
2. 医師の説明が理解できない場合は、納得できるまでお聞きください。
3. 他の患者さんの迷惑にならないよう、院内のルールはお守りください。
4. 医療従事者と共同して診療に積極的に取り組んでください。
5. 当院は医療者育成の使命を担っている大学病院であることをご理解の上、診療の可否を決定してください。
6. 医療行為は本質的に不確実な部分があります。安全な医療のため最大限の努力を払っておりますが、患者さんの期待にそぐわぬ結果を生じる可能性があることをご理解ください。

編集後記

今号より地域連携医療機関の先生のご紹介をさせて頂くことといたしました。連携医療機関の先生方におかれましては引き続きご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

（広報委員会　亀谷修平）



本広報誌についてご質問あるいはご意見のある方は下記までご連絡下さい。
日本医科大学千葉北総病院　医療連携支援センター
〒270-1694　千葉県印西市鎌苅 1715
電 話 0476-99-1810 ／ FAX 0476-99-1991
e-mail:hokusou-renkei@nms.ac.jp

編　集：日本医科大学千葉北総病院
広報委員会、医療連携支援センター
印　刷：伊豆アート印刷株式会社
発　行：2020年10月（季刊誌）